

歴史民俗資料館だより

令和8年3月号 弥生 仙台市歴史民俗資料館



〒983-0842 仙台市宮城野区五輪 1-3-7 TEL 022-295-3956 FAX 022-257-6401

令和8年度の学校利用の予約について

3月4日に来館する学校を最後に、令和7年度の学校利用が終わります。ご利用いただいた学校は、仙台市内の学校が65校（小学校58校、中学校2校、高校5校）、仙台市外の学校が42校、合わせておよそ4,200人の児童・生徒に来館していただきました。児童・生徒の皆さん、教職員の皆さん、ボランティアとして引率いただいた保護者の皆様、ありがとうございました。

県外の学校では、修学旅行で仙台に来た北海道の中学校や校外学習等で来た福島県の中学校がありました。これからもたくさんの皆さんに来ていただきたいと思います。また、後日、感想等をいただ学校もありました。職員一同励まされております。

令和8年度も、ぜひ御利用ください。心からお待ちしております。

令和8年度分の予約は、4月1日（水）午前9時から

電話で承ります

季節展示「ひな祭り」2月14日（土）～3月22日（日）

2月14日（土）から季節展示「ひな祭り」を開催しています。展示しているのは1階ロビーと2階の常設展入口付近と体験学習室です。

1階ロビーにある「七段飾り」は、丁寧で美しい装飾が見事です。2階には、明治初期に製作された堤人形のひな人形や明治時代後期のひな人形を展示しています。

間もなく、榴岡公園の梅が咲くことでしょう。美しい梅の花を愛でるとともに歴史民俗資料館の季節展示「ひな祭り」で春を感じてみませんか。



七段飾り「女雛」



堤人形のひな人形



明治時代後期のひな人形

くらしのかたち 「衣の生活」 寝具

【寝具】

寝具は、一般的に綿の入った布団であるが、泉区根白石では、大正時代まで藁床が多かった。他の地域でも、綿は貴重品であったため、板の間にじかに藁を敷く藁床も見られた。太白区秋保町の境野では、藁を重ねた上に、刺子の敷布であるシキワンバリを敷いて寝た。木綿の丈夫な布団皮の中に藁を入れた、藁布団も多くあったようだ。藁は湿気を吸収し、以外に暖かかったらしい。農家では、畳は高価なのでめったに敷けず、昭和に入って普及するまで、ほとんどがむしろやござを敷いた板の間で寝起きしていた。

布団は、布団皮に丈夫な木綿布を用い、中に綿を入れた。根白石では、敷布団・掛布団あわせて三貫（約11キログラム）の綿を入れるのが定法であったという。掛布団の下には、ドテラ（夜着の一種）を着たり、掛けたりした。ドテラとは、寝るときに着る一人用の綿入れ襦袢のことで、袖や裾に大きくフキを出して作る。

今のように軽い綿ではなくて、重い綿なので、ドテラと布団は、かなりの重圧感があったようだ。若林区の七郷地区では、夏でもドテラを当てて寝たと聞いた。敷布団の上敷に刺子の布を敷いたところもあるし、敷布団なしで、何もみかずに板の間にじかにねたところもあったようだ。

枕は、台型をした木の台の上に、蕎麦殻や粃殻を入れた小さな布の枕をのせた高枕で、中には小物を入れる引き出し付きの箱枕もあった。城下では、まげを結った女たちの中に、まげ用の枕を別に用意して、一緒に二つの枕を使った例も見られる。高枕は、まげに結った髪が崩れずに、具合が良かった。七郷では昔、枕の中に糠を入れたということだが、長く使っていると中の糠が湿気を吸収して、全体が湿ってきてしまい、時々枕の布を取り換えなければなかったという。後に蕎麦殻や粃殻に替わってからは、その必要がなくなって、具合が良くなったということだ。

布団皮は毎年夏に解いて洗濯し、ドテラも2年に一度ぐらいは洗濯して縫い直した。敷団綿も数年おきに打ち返した。

（参考文献：仙台市史 特別編6「民俗」）



「むしろ」



「高枕」